

物語作品のリメイクによって何が変わったのか
— 『ちいさいうち』と『小さな家』の比較検討 —

小田 康陽・花坂 歩

What Has Changed through the Remake of a Narrative Works ?:
Comparison of Two Picture Books

ODA, Koyo and HANASAKA, Ayumu

大分大学教育学部研究紀要 第47巻第1号

2025年9月 別刷

Reprinted From

RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 47, No. 1, September 2025

OITA, JAPAN

物語作品のリメイクによって何が変わったのか

—『ちいさいうち』と『小さな家』の比較検討—

小 田 康 陽*・花 坂 歩**

【要 旨】 松居直はその著書の中で、ディズニー社によってリメイクされた名作絵本を痛烈に批判している。原作のバージニア・リー・バートンの絵本『ちいさいうち』は、絵と語り、色彩の工夫によって家の周囲の変化や時間の変化を暗示的に伝える作品であるが、ディズニーによってリメイクされた『小さな家』は、家そのものに焦点をあてた描写が多く、感情表現の描出までもが明示的であるため、読者の関心は周囲の変化や時間の変化には及びにくい。松居がディズニーの名作絵本を批判した原因にはこうした表現方法の根本的な違いが影響していると考えている。

【キーワード】 松居直 バージニア・リー・バートン 『ちいさいうち』 ディズニー絵本 『小さな家』

I はじめに

松居直（まついただし、1926-2022）は福音館書店の編集者として戦後の日本の絵本文化の発展に大きく寄与した人物である。月刊物語絵本「こどものとも」の創刊から始まり、海外絵本の翻訳出版にも取り組み、晩年には NPO ブックスタート®の立ち上げにもかかわっている。

このように、絵本文化の発展に大きく関わってきた松居が、1973 年の『絵本とは何か』（日本エディタースクール出版部）では、驚くべき程にディズニーの名作絵本を批判している。例えば、以下のような言説がある。

- ・「有毒色素で着色された干物の皮をみせられているような気がします」（p.37）
- ・「死んだ色彩とむくろのように動かない絵、それがディズニーの絵本なのです」（p.37）
- ・「いわゆる名作絵本のすべて（といってもよいとおもいます）は、ダイジェスト版であり原作とは似ても似つかぬにせ物です。「名作絵本」というのは、「原作が名作である絵本」という意味で、絵本そのものは真っ赤なにせ物のことだといってよいでしょう。子どもたちに絵本を準備するには、まずこの名作絵本を捨てるところから始めていただきたいものです」（p.39）

令和 7 年 5 月 30 日受理

*おだ・こうよう 大分大学大学院教育学研究科教職開発専攻（教職大学院）

**はなさか・あゆむ 大分大学教育学部言語教育講座（国語科教育学）

・「さらにディズニーが、絵本に対する全くの無理解をさらけだしている例があります。バージニア・リー・バートンの傑作『ちいさいうち』はだれでもよく知っているでしょう。それがどれほどみごとに構成され表現された作品であるかも周知のことです。この作品をディズニーはアニメーション映画にし、ごていねいにも映画から絵本を作ったのです。ディズニー絵本『小さな家』がそれです。あまりにも無残に改竄されたこの絵本は醜悪でさえあります。そこにはアメリカのコモンセンスにつらぬかれたバートンのあのすがすがしい精神、アメリカの生活に対する愛情はもう感じられません。愚劣なドタバタ劇のむなしさだけです。このような美に背を向けた絵本は、もう子どもの本ではありません」(p.40)

松居は 1956 年に月刊絵本「こどものとも」を創刊し、当時、童画が主流であった中で、日本画家の堀文子の絵を創刊号に用いたり、絵本とは異なる分野で活躍していた堀内誠一、安野光雅、いわさきちひろらを絵本制作の世界に招き入れたりもした。また、松居は洋画家須田国太郎を叔父にもち、幼少期から毎年、父に連れられ、帝国美術院展にも行っていたようである。その他、松居(2012: 37-38)には、「日本画に培われた美意識」という題目で、竹内栖鳳が描いた犬を「犬よりも犬らしい」と思ったことや、上村松園が描いた美人画「序の舞」を観たときには、「こんな美しい人がいるのかいな」と驚いたというエピソードが紹介されている。

言うまでもなく、作品のリメイクは「原作とは別の作品」の創出であり、原作と比べて優劣を論じる類のものではない。それぞれにはそれぞれの持ち味があり、等しく尊重されるべきものである。それを前提にした上で、本稿では、松居の酷評を切り口に、バージニア・リー・バートンの絵本『ちいさいうち』と、ディズニー絵本『小さな家』の比較検討を行うことにする。検討の観点とは「構造(組み立て)」「内容・表現方法」「読者反応」の3点である。それらの検討を通して、それぞれの作品の読書効果を明らかにする。

Ⅱ 取り上げる作品について

『ちいさいうち』の作者はアメリカ人の絵本作家であるバージニア・リー・バートン(1909-1968)である。原作『The Little House』は 1942 年に米国で出版され、翌 1943 年にコルデコット賞を受賞している¹⁾。絵本としての日本語版は石井桃子による翻訳で、1965 年に岩波書店から出版された。2022 年 1 月 14 日には第 66 刷が発行されている。

一方の『小さな家』は「講談社のディズニー名作絵話」のシリーズの 1 つとして制作された。元になっているのは 1952 年に米国で公開された短編アニメ映画「The Little House」²⁾である。入手することができた 1968 年版のものでは、ウォルト・ディズニーが絵を、鶴見正夫が文を担当している³⁾。この短編アニメ映画「The Little House」はバートンの『The Little House』を元にしたものであるが、物語の展開こそ原作と似ているものの、原作の画風とは大きく異なったものになっている。バーバラ・エルマン(2004: 64)によれば、「家の構造さえ違って」おり、バートン自身も不満を抱いていたとのことである。

Ⅲ 2 作品の構造(組み立て)の比較

バートンの『ちいさいうち』は横組み左開きの見開き 21 場面で構成されている。文字は横

書きで、基本的に見開き左側に位置している。見開き右側に位置している場面は第 1, 19 場面であり、見開き両側に位置している場面は第 16, 20 場面である。基本的に、主たる絵は見開き右側に位置しており、主たる絵よりも小さめの挿絵は見開き左側に位置している。第 19, 21 場面では主たる絵が見開き左側に描かれている。第 2, 10, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 20 場面では主たる絵が見開き両側にわたって、画面を広く使って描かれている。登場人物は「ちいさいおうち」、建て主の男、建て主の男の妻、「こどもたち」(4 人)、「おとこのひと」、「おんなのひと」、「おとこの子」、「おんなの子」、「けんちくやさん」である。絵本の色合いは、田舎の場面では全体的に淡い色調であり、街の場面では全体的に暗い色調である。

以下は各 21 場面にタイトルをつけたものである。

- 第 1 展開部 季節の変化を感じる「ちいさいおうち」
 - 第 1 場面 「ちいさいおうち」と建て主の登場
 - 第 2 場面 「ちいさいおうち」と時間の流れ
 - 第 3 場面 「ちいさいおうち」の街への想い
 - 第 4 場面 「ちいさいおうち」と春の到来
 - 第 5 場面 「ちいさいおうち」と夏の到来
 - 第 6 場面 「ちいさいおうち」と秋の到来
 - 第 7 場面 「ちいさいおうち」と冬の到来
- 第 2 展開部 街への変化と「ちいさいおうち」
 - 第 8 場面 自動車と道路の出現
 - 第 9 場面 「がそりん・すたんど」や「ちいさいおみせ」の出現
 - 第 10 場面 家主のいなくなった「ちいさいおうち」
 - 第 11 場面 街を好きになれない「ちいさいおうち」
 - 第 12 場面 「でんしゃ」の出現
 - 第 13 場面 季節の変化を感じられない「ちいさいおうち」
 - 第 14 場面 孤独を深める「ちいさいおうち」
 - 第 15 場面 高層ビルの出現
 - 第 16 場面 街を「いやだ」と思う「ちいさいおうち」
- 第 3 展開部 田舎に帰る「ちいさいおうち」
 - 第 17 場面 「おんなのひと」に見つけられた「ちいさいおうち」
 - 第 18 場面 移動される「ちいさいおうち」
 - 第 19 場面 田舎へと移動する「ちいさいおうち」
 - 第 20 場面 再び丘の上に建つ「ちいさいおうち」
 - 第 21 場面 語り手による語り

『ちいさいおうち』は、主たる登場人物である「ちいさいおうち」を中心に展開する。以下にあらすじを示す。

田舎の静かな場所に建てられた「ちいさいおうち」は日々や季節の変化を感じながら静かに暮らしている(第 1 展開部)。ある日、「ちいさいおうち」の周囲が開発されはじめ、街へと変化していく。「ちいさいおうち」は変化する周囲の環境を心地よく思えず、昔の田舎の風景や時

間を懐かしく思う（第2展開部）。長い時間の後、「ちいさいおうち」の建て主の玄孫にあたる「おんなのひと」とその家族によって、「ちいさいおうち」は新たな田舎で過ごせることになる。再び、「ちいさいおうち」は静かに心地よく暮らすことができるようになる（第3展開部）。

一方のディズニーの『小さな家』は横組み右開きの見開き18場面で構成されている。文字は縦書きである。見開き左側に位置している場面は、第3, 6, 10, 11, 13, 14, 16場面であり、見開き右側に位置している場面は、第1, 2, 4, 5, 7, 8, 9, 12, 15, 17, 18場面である。絵は、短編アニメ映画の各場面を切り取ったような絵であり、絵が1枚の場面と2枚の場面がある。絵が1枚の場面は第2, 4, 7, 14, 16場面であり、見開きの5分の4ほどの画面を使って描かれている。絵が2枚の場面は、第1, 3, 5, 6, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 15, 17, 18場面である。登場人物は「ちいさないえ」、「はなむこさん」、「はなよめさん」、「もりのことりたち」（2羽）、「おがわのかえる」（2匹）、「やまのうさぎ」（2匹）、「からす」（2羽）、「こども」（4人）、「おおきないえ」（2棟）、「あば一とをたてるひとたち」、「あば一と」（2棟）、「しゃべる」、「でんしゃ」、「通行人」、「新しいはなむこさん」、「新しいはなよめさん」である。絵は鮮明な色で描かれている。

以下は各18場面にタイトルをつけたものである。

- 第1展開部 幸せに過ごす「ちいさないえ」
 - 第1場面 「ちいさないえ」と新婚夫婦の登場
 - 第2場面 「ちいさないえ」と周囲の風景
 - 第3場面 「ちいさないえ」と周囲の動物たち
 - 第4場面 「ちいさないえ」と「こども」たち
- 第2展開部 街への変化と「ちいさないえ」
 - 第5場面 「おおきないえ」の出現
 - 第6場面 「おおきないえ」の焼失
 - 第7場面 「あば一と」の出現
 - 第8場面 ひどい目に遭う「ちいさないえ」
 - 第9場面 空き家になった「ちいさないえ」
 - 第10場面 孤独を深める「ちいさないえ」
 - 第11場面 「しゃべる」に恐怖を感じる「ちいさないえ」
 - 第12場面 「びるでいんぐ」の出現
 - 第13場面 「でんしゃ」に睨まれる「ちいさないえ」
 - 第14場面 高架橋の出現
 - 第15場面 「通行人」から罵声を浴びる「ちいさないえ」
 - 第16場面 ネオンと騒音に苦しむ「ちいさないえ」
- 第3展開部 田舎に帰る「ちいさないえ」
 - 第17場面 移動される「ちいさないえ」
 - 第18場面 再び丘の上に建つ「ちいさないえ」

『小さな家』もバートンの『ちいさいおうち』と同様に、主たる登場人物である「ちいさないえ」を中心に展開する。田舎の小さな丘の上に建てられた「ちいさないえ」は「ことり」や

「かえる」、「うさぎ」や「からす」といった動物たち、夫婦や「こども」たちと楽しく暮らす（第1展開部）。その後、両隣に「おおきないえ」や「あばーと」が建設されはじめ、「ちいさないえ」は劣悪な環境に置かれるようになる。家主も引っ越し、「ちいさないえ」は独りぼっちになる。いつしか、田舎だった周囲は街へと変貌し、電車やネオンによる音や光が増える。古びた「ちいさないえ」には罵声が浴びせられ、気が滅入ってしまう（第2展開部）。その後、「ちいさないえ」は重機で運ばれ、田舎の小さな丘の上で過ごせるようになる。そこに新婚夫婦がやってきて、新たな日々が始まる（第3展開部）。

バートンの『ちいさいおうち』とディズニーの『小さな家』との決定的な違いは、第2展開部の「街への変化」の扱いである。バートンの『ちいさいおうち』の場合、第1展開部が7場面、第2展開部が9場面（計16場面）であるのに対して、ディズニーの『小さな家』は、第1展開部が4場面、第2展開部が12場面（計16場面）である。ディズニー版のほうが都市化の過程と「小さな家」の悲壮感をより強く表現している。また、ディズニー版の第3展開部はわずか2場面で構成されているが、バートン版は「おんなのひと」が登場する場面と田舎への移動場面、語り手による語りの場面を加えた5場面で構成されている。バートン版の方が田舎に戻る「ちいさいおうち」をより丁寧に描いている。

IV 2 作品の内容及び表現方法の比較

1 絵に着目した比較と検討

バートンの『ちいさいおうち』では、時間の経過とともに「ちいさいおうち」の周囲の風景が田舎から街へと変化する。それと合わせて、人が住まなくなった「ちいさいおうち」も「ペンキをはげ、まどはこわれ、よろいどははずれて、ななめにさがっ」たような状態になり、「ちいさいおうち」は「みすぼらしくなって」いく。

第2場面から第17場面まで、「ちいさいおうち」は画面のほぼ中央の同じ位置に描かれている（図1）⁴⁾。「ちいさいおうち」が同じ位置に描かれていることで、かつて丘であった場所に「ちいさいおうち」が在り続けたことが強調される。また、その「ちいさいおうち」の見た目もそれほど大きく変化していかないため、はじめは「ちいさいおうち」を注視していた読者も次第に周囲の様子の変化や季節、月日などの時間の変化に関心を広げていく。

一方のディズニーの『小さな家』⁵⁾は、登場人物の擬人化がバートンのものよりも強い。登場人物のうち、人ではないのは「ちいさない



図1 『ちいさいおうち』の書影（表紙）

この画像は表紙であるが、本作品の第2場面から第17場面において、「ちいさいおうち」は画面のほぼ中央の、ほぼ同じ位置に描かれ続ける。ページを捲ってもその位置が変わることはない。

え」、「もりのことりたち」、「おがわのかえる」、「やまのうさぎ」、「からす」、「おおきないえ」、「あばーと」、「しゃべる」、「でんしゃ」である。「ちいさないえ」、「おおきないえ」、「あばーと」、「しゃべる」、「でんしゃ」には目や口、鼻が描かれており、表情や心情が読み取れる。「もりのことりたち」、「おがわのかえる」、「やまのうさぎ」、「からす」はもともと目を持つ生物だが、実物よりも目が大きく描かれ、表情がより強調されている。

主要な登場人物である「ちいさないえ」は、実に様々な表情で描き分けられている。

第1～4場面では、目を細め、眉が緩やかな弧を描き、口元が微笑んだように見えるのんびりとした表情、第5場面では両脇に「おおきないえ」が建てられ、それをきょろきょろとしたまなざしで気にする表情、第6～8場面では両脇の「おおきないえ」が「あばーと」になり、窮屈さと不安を浮かべる表情、それはまぶたを落とし、口を閉じ、苦痛に耐えているようにも見える。第9～10場面は「FOR RENT」という立札とともに、まぶたを落とした虚ろな表情、第11場面は「しゃべる」が間近で作業するのを眺める不安げな表情、第12～14場面は表情としては第6～8場面と似ているが、道を行き交う人を眺める寂しげな表情、第15～16場面は賑やかになった街の様子を上目遣いで眺める表情、第17場面は目を閉じ、口を板でバツ印のような形で封じられた表情、第18場面は目を大きくし、口も微笑んでいるように見える表情で描かれている。読者は「ちいさないえ」に表情があることで「ちいさないえ」の心情の変化に注意していくようになるだろう。それは、「ちいさないえ」に照準を定めて、出来事と心情の変化を追っていく読みをするということである。

バートンの『ちいさいおうち』とディズニーの『小さな家』の絵の比較によってわかることは、立ち広がる読者の意識の違いである。バートンの『ちいさいおうち』においては、目を引く存在は主たる登場人物である「ちいさいおうち」であるが、「ちいさいおうち」の画面内での位置が固定化されていることで、読者はそれ以外のものに関心を広げるようになる。「それ以外のもの」とは、周囲の様子の変化や季節、月日などの時間の変化である。一方のディズニーの『小さな家』は、登場人物の強い擬人化によって登場人物の表情や感情が強調されているため、否応なく読者はそれに引き寄せられる。さらには、それを補強するかのように、感情表現や評価の言葉も置かれている（詳細は次節を参照）。特に、「ちいさないえ」は登場回数が多いため、読者は「ちいさないえ」の身に起こる出来事や気持ちの変化に捕われるように読むことになる。

2 語りに着目した比較

バートンの『ちいさいおうち』は「ちいさいおうち」を主語にした三人称視点で語られる。例えば、「それからながいあいだちいさいおうちは、おかのうえからまわりのけしきをながめて、しあわせにくらしてきました」のように、「ちいさいおうち」を主語とした語りが、第2場面以降、3, 4, 5, 6, 7, 8, 10, 11, 16, 19, 20 場面であらわれる。読者は、まずは語り手の立ち位置で物語を見ていくこととなるが、「ちいさいおうち」を主語にした語りに引き寄せられ、次第に「ちいさいおうち」の立ち位置で周囲の変化を眺めていくことになる。

そして、最終ページの第21場面の語りで、それが大きく変化する。

ちいさいおうちは もう二どと まちへ いきたいとは おもわないでしょう……
もう二どと まちにすみたいなどと おもうことはないでしょう……

絵本の最終ページにおけるこの語りは「ちいさいおうち」の思いを推測する形で語られている。それまでは「ちいさいおうちはまちはいやだとおもいました」（第16場面）のように、代弁の語りをとっていたのに対し、ここでは、語り手自身の立ち位置から状況を語っている。読者にとっては、「ちいさいおうち」の視座で思考することが妨げられ、語り手の立ち位置から物語全体を俯瞰するように促されることになる。

次に、ディズニーの『小さな家』についてである。ディズニーの『小さな家』には登場人物たちの会話がある。第2場面で「ちいさいいえ」は「たのしいわ。ひとりぼっちだって、わたしはしあわせ」、第3場面では「からす」に対して、「これこれ、いたずらをしちゃだめですよ」、第9場面では引っ越して出ていく家主に対して、「まって。わたしもつれてって」、第11場面では「シャベル」に対して、「ひゃあっ、こわい」、第16場面では「ああ、めがまわりそう」、第17場面では重機に対して、「まあ、こわい。なにををするの」のように、6つの場面で、実際に話していたり、内言が明らかにされていたりする。また、『小さな家』では「ちいさいいえ」に対する評価も語られる。第1場面では「はなよめさん」が「まあ、すてきなおうち」、第3場面では「やまのうさぎたち」が「わあ、いいおうち。ぼくたちもすみたいなあ」、第4場面では「こどもたち」が「いいおうち」、「いつまでも、ここにたっていて」と肯定的な評価をしている。第7場面では「あばーとをたてるひとたち」が「なんて、じゃまないえだろう。はやくひっこしたらいいんだ」、第15場面では通行人らが「こんなきれいなまちに、ずいぶんみっともないいえがあるじゃないか」、「ほんとに。はやくつぶしちゃえばいいんだわ」と否定的な評価をしている。その他、「わたし」という1人称の主語を用いて語っているところもある。それぞれの登場人物の思ったことや考えたこと、感じたことが明示されていることが特徴である。

3 色彩に着目した比較

バートンの『ちいさいおうち』の第1展開部は全体的に明るい色調で描かれている。第4場面と第5場面は、春から夏にかけての田舎の季節の変化が描かれており、第4場面は「のはらのくさもみどりにかわり」、第5場面は「木々は、みどりはでつつまれます」とあるように緑色である。第4場面の緑色は黄緑色に近く、その中でも細かな濃淡の違いがある。第5場面の緑色は第4場面に比べ緑色が濃くなっていて、葉が成熟し青々と変化している。第6場面は秋を黄色や赤色を中心に、第7場面は冬を白色で表現している。黄色や赤色が赤茶色になる部分があったり白色でも青色に近い白色であったりすることによって、田舎の丘の起伏や木々の落ち葉の重なっている様子が理解できる。こうした色の濃淡や細かな色の工夫によって、物語に時間が流れていることが違和感なく感じ取れる。次の第2展開部は全体的に暗い色調で描かれている。第10場面と第12場面の建物は茶色で描かれ、第15場面から第18場面までのビル群は灰色や黒色で描かれている。いずれの場面にも色の濃淡があり、茶色や灰色、黒色といった暗い色である。このことによって街の象徴である建物やビル群の威圧感や存在感が強調されているように感じられる。

一方のディズニーの『小さな家』は全体的に鮮やかで明暗の強い色調で描かれている。この絵本版の『小さな家』は短編アニメ映画を元としているのだが、絵本の色の鮮やかさを比較した時、絵本の方がより鮮やかな色で描かれている。例えば、絵本版の「ちいさいいえ」の屋根はピンク色であり、そのピンク色は一貫して鮮やかである。一方の短編アニメ映画の「ちいさいいえ」の屋根の色は冒頭と終末部では明るい赤色であるが、夜の場合や「ちいさいいえ」が

さまざまな災難に見舞われる場面では暗い赤色で描かれている。

パートンの『ちいさいおうち』とディズニーの『小さな家』の色彩を比較すると、パートンの『ちいさいおうち』からは色の濃淡によって季節の変化や「ちいさいおうち」の周囲の様子の変化を感じ取ることができる。対するディズニーの『小さな家』は全体的に明るく鮮やかな色調で描かれている。動画と静止画という媒体の違いに対する配慮が十分ではなかったのか、松居が「有毒色素で着色」と非難していたのも理解できるほどに、いわゆるベタ塗りのような仕上がりになっている。

V 総括と展望

これまで見てきたように、パートンの『ちいさいおうち』とディズニーの『小さな家』を比較検討することで、2つの作品の違いを明らかにできたと考えている。では、こうした違いによって、読者にどのような効果がもたらされるのか。

パートンの『ちいさいおうち』は、「ちいさいおうち」が同じ位置に描かれ続けることで、「ちいさいおうち」だけでなく、その周囲の様子の変化や季節、月日といった時間の変化にも関心が及ぶようにできている。読者においては、「ちいさいおうち」の動向を気にしながらも、その周囲の変化をも気にするという2重性を体感することになる。それとともに、語り（地の文）は「ちいさいおうち」を主語していることが多いので、物語が展開するにつれて読者の立ち位置は「ちいさいおうち」に引き寄せられていく。さらには、田舎と都会の対比が構造的にも配色的にも明らかなので、読者は田舎と都会のどちらをより好むのかという価値判断を促されることにもなる。もちろん、「ちいさいおうち」に寄り添う語り手の影響によって、読者は田舎をより好ましいものと感じることだろう。その上で、最終ページにおける視座の引き戻しである。読者は「ちいさいおうち」の視座から引き離されるが、田舎を好ましく思う余韻からは逃れられない。非常によくできた作品である。一方のディズニーの『小さな家』も、田舎を好ましく思う気持ちにはなるのだが、登場人物の発話や評価が気になり、読者の関心は「ちいさいいえ」から離れることができない。非常に直接的な印象が残るのがディズニー版である。

なお、松居は月刊誌「母の友」（福音館書店、2001）で自身の絵本研究のスタンスについて以下のように述べている。

絵本研究についての私の考え方と仕方は、まず、今読まれ続けている絵本作品の意味や価値、思想を探りたい。内容だけではなく、この作品になぜその表現の手法がとられたかを調べないといけない。そして、作家が生きた社会、作品の背景にある時代との関係も検証してみる必要があるのです。

松居は絵本作品の意味や価値、思想を考えるうえで、絵本の表現の手法だけでなく、作家自身のことや時代背景なども重要な意味を持つと考えていた。松居は同誌でパートンの『ちいさいおうち』を例に挙げているが、その際も、歴史や文化を踏まえて、「アメリカとは何か、つまりアメリカのアイデンティティを子どもたちに伝える作品でしょう」と述べている⁶⁾。

また、松居が述べていることではないが、パートンの『ちいさいおうち』は1954年に日本語版が出て以来、現在に至るまで複数回の改版が行われている。簡易に調べただけでも、本の

大きさが変わったり、色彩の調整が行われたり、表紙や献辞の文字が加筆・修正されたりしている⁷⁾。ディズニーの『小さな家』やアニメ版の『小さな家』については未確認であるが、長く読み継がれている作品だからこそその改版の歴史がある。こうした研究的な読みの醍醐味も大切にしたいものである。

本稿では、バージニア・リー・バートンの『ちいさいおうち』とディズニーの『小さな家』の表現性の違いを明らかにした。松居はディズニーの名作絵本を批判していたが、それはディズニーそのものの批判ではなく、配色やテーマの扱い方において、原作と大きく異なっていたからだと考えている。ディズニーの『小さな家』だけを読むのではなく、バートンの『ちいさいおうち』とともに読んだり、ディズニーの短編アニメ映画も観たりすることが望ましい。読書体験は、原作とそこから派生した作品とを比較し、内容や表現性の違いに気づき、他者ともそれを交流することでよりいっそう豊かになる。今後も、それを可能にする作品の探索や扱い方について研究していきたい。

附記

本稿は、花坂の着想に基づき、小田が調査・考察を行ったものである。本文は両者の協議を経てのものである。なお、本研究は JSPS 科研費 JP25K06152 の助成を受けたものである。

注

- 1) 『ちいさいおうち』の制作に関しては、バーバラ・エルマン (2004 : 57) が「1932 年、バートンと夫がフォーリーコープに家を買った時、道路ばたの交通騒音をさけて、建物を後方に移し、まわり一面にバートンの好きなデイジーを植えた。この移築の経験と、バートンがその時に想像したことが、この本の中心になっている」と述べ、作品と彼女の実験の経験との関連を示唆している。
- 2) 短編動画アニメについては、「DVD 名作アニメシリーズ FANTASY ANIME vol.10」(ケー・アイ・コーポレーション, 2013) 所収の「小さな家」を視聴した。なお、日本語版のアニメは 1980 年代ごろに制作されたようだが、その正確な時期やそのときの訳者が誰なのかは調べ切れていない。今後の課題としたい。なお、この短編動画アニメについては、上記 DVD に「これらの作品は著作権保護期間を経過しており、パブリックドメイン (公共財産) として認められています」との注記があり、容易に視聴が可能である。
- 3) 『講談社のディズニー名作絵話 小さな家』(講談社) については、今回入手できた 1968 年版のもの以前に、1960 年代前半ごろにも出版されていた形跡があるのだが、正確な出版年は調べ切れていない。今後の課題としたい。
- 4) 『ちいさいおうち』(岩波書店) の書影 (表紙画像) の利用については許諾の必要がないことを岩波書店のホームページにて確認した (確認 : 2025 年 5 月 30 日)
- 5) 『講談社のディズニー名作絵話 小さな家』(講談社) の書影 (表紙画像) については、講談社に使用の許諾を求めたが、個人からの申請を受け付けていないとのことで許諾を得られなかった。
- 6) 「アメリカのアイデンティティ」について、松居 (2001) は、「アメリカ思想史や文化史の中では、アメリカ社会に根強く生きている考え方として、“都市と田園との対照”と田園主義があげられます」としている。田園主義とは「田園を理想社会とする」考え方であり、『ちいさいおうち』は、まさに「田園が都市化され、その都市から再び田園に帰るというアメリカン・ドリー

ムの一つの形を描いた」と述べている。

7) 岩波書店児童書編集部「やかましネットワーク」(2019年12月, No.59)を参照した。

参考・引用文献

ウォルト＝ディズニー (絵)・鶴見正夫 (文)・井上謙次 (表紙・見返し装丁) (1968)『講談社のディズニー名作絵話 小さな家』講談社

バー吉ニア・リー・バートン・石井桃子 (訳) (1965)『ちいさいおうち』岩波書店

バーバラ・エルマン・宮城正枝 (訳) (2004)『ヴァー吉ニア・リー・バートン 「ちいさいおうち」の作者の素顔』岩波書店

松居直 (1973)『絵本とは何か』日本エディタースクール出版部

松居直 (2001)「松居直の絵本講座 2 バー吉ニア・リー・バートンの『ちいさいおうち』を読む」, 『母の友』福音館書店, 576, 72-81

松居直 (2012)『松居直自伝 軍国少年から児童文学の世界へ』ミネルヴァ書房

What Has Changed through the Remake of a Narrative Works? :

Comparison of Two Picture Books

ODA, Koyo and HANASAKA, Ayumu

Abstract

We compared Virginia Lee Burton's *Little House* with Disney's *Little House* to clarify Matsui's view of picture books. Matsui has made harsh criticisms of Disney's classic picture books, particularly the alterations made by Disney. In the paper, we analyzed the differences between the two works from the perspective of pictures, narration, and color. As a result, we found the following: In Burton's work, the position of the house is kept constant, which allows the reader to focus on the surrounding environment and the changes in time. On the other hand, in Disney's work, the house is personified and emotions are emphasized through direct expressions and dialogue, so the reader's attention is focused on the house itself. This makes it difficult for the reader to get involved in the changing situation and atmosphere around the house. Furthermore, Disney's work has vivid colors and strong contrasts between light and dark, and the strong visual stimuli ruin the idyllic atmosphere of the story. We concluded that Matsui places importance on indirect expression.

【Key words】 Tadashi Matsui, Virginia Lee Burton, *The Little House*,
A picture book by Disney